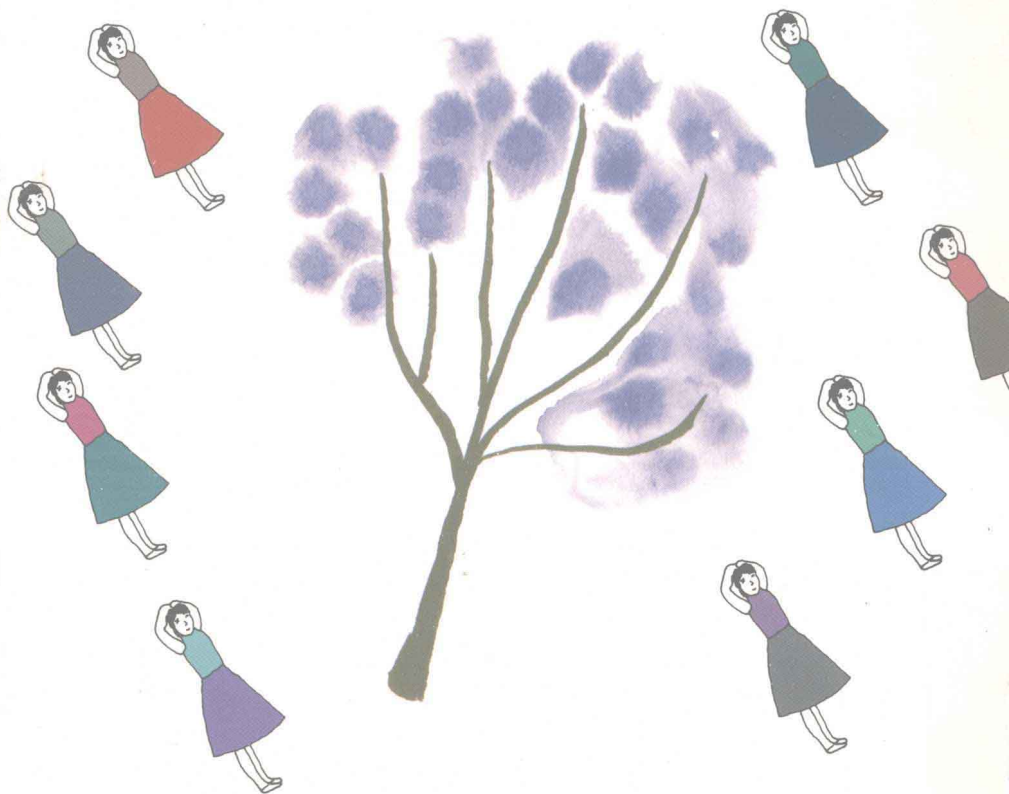


空ゆく雲を 追いかけて

渡辺一枝



情報センター出版局



渡辺一枝 わたなべ いちえ
87年春に18年間の保母〈いちえさん〉にビリオドを打ち、作家〈いちえさん〉生活に入った。このシリーズも本書で三作目になる。しなやかで不思議な〈いちえさん〉の目下の関心は、地球の上を自分の足でドンドン歩くこと。行ってみたいところはいっぱいだ。

空ゆく雲を追いかけて

1988年1月14日 第1刷

1988年2月28日 第3刷

著 者 渡辺 一枝

定価はカバーに表示してあります。

発 行 者 富田 耕作

発 行 所 株式会社 情報センター出版局

東京都新宿区四谷 2-1
四谷ビル 〒160
電話 東京 (358)0231
振替 東京 4 46236

©1988 Ichie Watanabe

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-7958-0193-2

印刷 萩原印刷

空ゆく雲を追いかけて——目次

第一章 雲のかたち・空のかたち

雲のかたち 8

小さな飛行機で 16

二重奏 20

虹 23

月夜の影踏み 27

屋上コンサート 32

雲を集めるおじさん 36

第二章 見えないかたち

梅——花の香り① 42

沈丁花——花の香り② 44

薔薇——花の香り③ 46

梔子——花の香り④ 47

百合——花の香り⑤ 50

忍冬——花の香り⑥ 52

金木犀——花の香り⑦ 55

桜――花の香り⑧ 57

菊――花の香り⑨ 58

赤ちゃん 59

家の匂い 62

「コーヒー、入れましょうか」 64

整髪料 68

天花粉 71

霧の朝 74

夏草の土手 78

夕の煙 80

こぼれたおにぎり 83

森の中 86

第三章 耳のかたち

私の耳は…… 92

足音 98

話し声 100

血の婚礼 103

第四章 いつものかたち

太鼓 106

斑鳩の里 111

話したがりの犬 116

鐘の音 122

オルゴール 126

梢の風 130

耳の中で 133

夜の声 137

傘 140

靴 142

靴 145

鞆の中 150

眼鏡 153

サングラス 158

腕時計 161

ハンカチ 163

第五章 旅のかたち

藍の紬で	198	ボタン	168
風の吹く草原	204	下駄	170
遙かの日へ	208	モンペ	174
たまに新宿	215	炊飯器	177
秋へ	220	まな板	180
流れに乗って	222	鋏	182
バラのロンドン	230	鉛筆	184
		ペーパーウェイト	189
		自転車	192

装 幀——亀海昌次

カバーイラスト——沢野ひとし

本文写真・キャプション——椎名 誠

第一章 雲のかたち・空のかたち

雲のかたち

綿雲

「おーい、雲！」

声をかけたくなるのです。だってそれは、あまりにもゆったりと、ふうわりと流れてゆくものだから、私は声をかけたくなるのです。

うらうらと暖かな小春日に、どこから生まれるのだから、幼い日々雲に乗って漂うのを夢みたのはこんな雲だったかと、それは懐かしさにつながる雲でした。

「おーい、雲！」

追いかければその端につかまって、ニールスのように空を飛べるかと思われました。

絹の雲

空の高みに、軽やかに舞う雲がありました。あんな高みに、あんなに羽毛のように、軽やかに伸びて。あまりにも、あっけらかんと青く澄んだ明るい空で



雲とその影が大平原で競走をは
じめたぞ。

した。

悲しいことなど何もないはずだと言いきかせるのに、どこからそんな想いが湧くのか、自分がひどく頼りないと思われる日でした。

もう空を眺めるのは止めよう、と言いきかせるのにまた、流れてゆく雲に、いつの間にか自分を重ねているのです。

翼雲

本当にそれは、大空に舞う翼のようでありました。風に吹かれて翼を広げ、飛ぶ鳥のようでありました。

さっきまで降っていた雨は止み、青く広がってきた空に、雲が生まれました。風がふるったノミなのか、雲は翼となりました。

♪あの大空に 翼広げ

飛んでゆきたいよ♪

人はうたいます。そう私も、あの大空に翼広げ、飛ぶ雲になりたいのです。

飛行機雲

青空に、ひと筋の白。尾を引いて流れてゆく。その先には光る機体。どこまで伸びてゆくのか。

この名を知った幼い日、「それならば、あれは人のつくった雲か」と問えば

顔かれ、憧れの思いでもって眺めた雲。その同じ雲を、忌まわしい悪夢の日々につながらる思いで見入る人々も居ることを知ったのは、「それならば」と問うた私と同じ、幼い子を持つ母となつてからのこと。

ひと筋の白が描く先、子どもらの空が曇ることのないようにと、今は祈り眺める雲。

入道雲

まったくそれは、元気の良い悪たれ坊主のようでした。見ている間にむくむくむくと盛り上がり、あちらの裾からもこちらの裾からも湧いて上がるのです。その小気味良いほどの腕白のさまに、私は親しみを覚えるのです。まるで夏の熱い陽射しと競うように、その勢いを誇示するようでもありました。

やがて激しく夕立を降らせても、その降りざまは、まこと入道の仕業と思わせるにふさわしい、胸のすくようなこの雲に拍手、喝采。

いわし雲

雨の後に風を残し、台風は去りました。明るくなった空に、風は雲を運びました。小さなうろこ状の雲は、やがて空いっぱいになり、その青を白いうろこで埋め尽くしました。

空の広さを思いました。見ていれば身の小ささを知りました。

夕は山の端を朱に染めて広がり、雲は彩られてゆきました。見ているうち、
なぜだか涙がこぼれました。

霧の雲

さっきまで見えていた山肌が、今はもう白く霞み、やがてあたりはすっかり
と乳色のヴェールに包まれました。

髪も肩も細やかな水滴に濡れました。木々の葉も草の葉も露の中にあり、す
べての音はその乳色に吸いこまれてゆきました。

どれほどの時か、乳色の霧が切れ、薄い陽が射してきました。さっき降った
水滴は、煙のように、ゆうゆうと空へ昇ってゆきました。

ひそひそ声の草たちが、ざわめくようでありました。

彩雲

青空に、ほっかと浮かぶ雲でした。まるで幼い日に描いた雲そのままに、
ほっかと浮かぶ雲でした。

そしてそのひとつ、雲の縁は緑、ピンク、水色と彩られ、輝いておりました。
見とれているとその色たちは、なお濃く色づいて、まるで虹のようでもありま
した。

午後の陽はまだ高く、気持のよい冬の日でした。何事か良いことの兆しのよ



雲が何か喋ると波がそれにいち
いちこたえているようで……。

うで、一人の山旅の足も軽く帰りの道を行いました。

機上から

この空を見れば、だれだってこの上を歩きたいと思うに違いない、と思われました。だれだって、その上が歩けそうだと思うに違いない、と思われました。それは、雪の原のようでありました。ぼこぼこ、平らではないけれど、それは雪の原のように見えました。

けれどもおっと、気をつけなければ、足を踏み外せばどこまで落ちるか、その先もわからない雲ではありました。

光芒

それは荘嚴なシンフォニーを奏でているようでした。

夕暮れに、雲の段は横に広がり、灰色の階調となりました。その雲の層の向こうに、高みに光がありました。

光は降り注ぎ、雲の間にこぼれて広がりました。いく筋も、いく筋も光が地に降りました。

雲が動くのか、その陰で黄金の太陽が動くのか、光は動いてゆきました。

雲と光のスペクトルに、私は手を合わせ、息をのんでおりました。